

京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要 2018

<論文>

ちからをはかる：後古典期後期マヤの戦闘の一概念

..... 郷 澤 圭 介 1

<研究ノート>

マンガで学ぶ郷土の歴史と文化遺産

—メキシコ、トラランカレカにおける遺跡に関する住民の知識と経験をめぐって—

..... 小 林 貴 徳 25

<調査研究報告>

ニカラグアのカリブ海沿岸地域、ブルーフィールズにおける文化再生

—芸術活動の空間と音楽に秘められたメッセージ性—

..... 青 木 敬 47

イグレシア・ビエハ (Iglesia Vieja) 遺跡の調査

..... 金 子 明 67

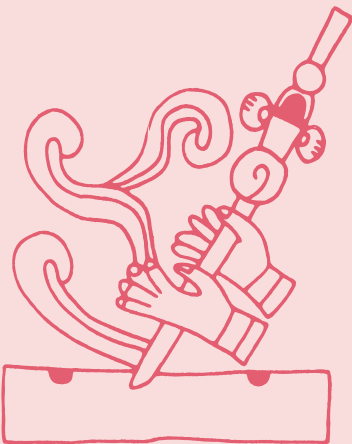
Surcos de cultivo prehispánicos encontrados bajo las cenizas del Volcán Plan de la Laguna, El Salvador, C.A.

..... 柴 田 潮 音、オスカル・カマチヨ、
ホセ・ガブリエル・セレン、ジェニィ・エリサベート・メンヒーバル 99

<書評>

桜井三枝子編『グアテマラを知るための67章』【第2版】

..... 牛 島 万 115



〈論 文〉

ちからをはかる：後古典期後期マヤの戦闘の一概念

郷 澤 圭 介*

キーワード

マヤ、戦争、後古典期後期、一対一の闘い、意味論的分析

Resumen

El presente artículo trata el concepto de combate cuerpo a cuerpo, uno de los conceptos relacionados con la guerra entre los indígenas mayas del norte de la Península de Yucatán, México, en el Posclásico Tardío (del siglo XIII al XVI aproximadamente). Este trabajo se realizó para contribuir al desarrollo de la historia militar y la sociología de la guerra de los mayas del periodo correspondiente, de las cuales se ha estudiado muy poco. Por lo tanto, la presente investigación da un paso adelante para aquellos campos académicos arrojando luz sobre uno de los temas cruciales para esclarecer el significado de “entablar la guerra”.

El objetivo es reconstruir el concepto del combate cuerpo a cuerpo, -acción esencial de una batalla-, y su importancia en su sociedad. Con el fin de alcanzar la meta, elegimos analizar tres palabras y morfemas claves del idioma maya yucateco: *ppiz*, *muk* y *nup*.

Como metodología hicimos un análisis crítico de documentos novohispanos escritos por los españoles y nobles autóctonos, además del análisis de campo semántico de los términos mayenses obtenidos de “bocabularios” o diccionarios maya-español, recopilados durante la época Colonial. Este último es el único método para extraer conceptos relacionados con la guerra ya que no se encuentra descrita en las fuentes históricas documentales.

はじめに

1517年3月半ば、100名足らずのスペイン人たちは一睡もできぬまま熱帯の夜明けを迎えた。海岸から、人のうねりが押し寄せてくる。いくつもの旗指物や大きな羽根の頭飾りが明け方の陽光に照らされ、そのうねりの上を漂っている。彼らはその光景を目の当たりにしたとき、未踏の陸地に辿り着いてから2度目となる先住民との戦闘が、もはや避けられないことを覚悟した¹⁾。

やがて圧倒的な数の敵戦士の怒号と太鼓の音に囲まれたスペイン兵は、収穫後の枯れ茎が残るトウモロコシ畑に追い詰められ、矢、石、投槍を雨あられと浴び次々と倒された。すかさず寄せては挑みかかる先住民。劣勢のヨーロッパ人たちは背丈ほどの長さの短槍で突かれ、燧石（すい

* 慶應義塾大学非常勤講師

せき)の刃を埋め込んだ諸刃の木剣で叩き斬られ、至近距離から矢を射込まれる。しかし彼らは怯まなかった。当時新大陸住民が見たこともなかった鉄製の剣と槍の穂先による鋭い斬撃・刺突、貫通力にすぐれた弩(ど)の射撃で立ち向かい、火縄銃を轟かせ懸命に抵抗した。その切れ味と音におどろいたマヤ側は多少怯み距離を置く。その隙をみてスペイン人たちは何とか包囲を突破し、浜辺へと必死に駆けた。浜に着くと自分たちの小舟に乗りこみ沖合の母船へ向かって漕いだ。そして海に入ってまで追いつがる敵の槍を振りのけ矢を搔いくぐり、母船にすべり込んでようやく難を逃れることができた。戦闘中1名を除き全員が矢を受け槍傷をおい、傷の悪化で息絶え海に捨てられた者も含め最終的に50人以上が死亡した。そして2名が連れ去られた後生贄にされたのであった(Díaz del Castillo 2011:5-10; Landa 1994:89)²⁾。

新たな征服地を求めキューバのハバナを出港、未知の大海原をひたすら西へと進み、ついに辿り着いた、後に「ヌエバ・エスパーニャ」と呼ばれるメキシコの一角、ユカタン半島カトチェ岬。これまでカリブ海の島嶼部では見たこともなかった立派な石造りの建造物が視界に飛び込んできた瞬間、キューバで一攫千金の機会もなく悶々と日々を過ごしていたスペイン兵士たちは、富の予感と明るい未来に目を輝かせ胸躍らせた。しかしわずか2週間後、水を求めて立ち寄った半島西岸のチャンボトン村で先述の戦いを仕掛けられ、この地の先住民マヤ族の戦闘能力の高さを嫌というほど思い知らされた後キューバへと逃げ帰ったのであった(図1)。

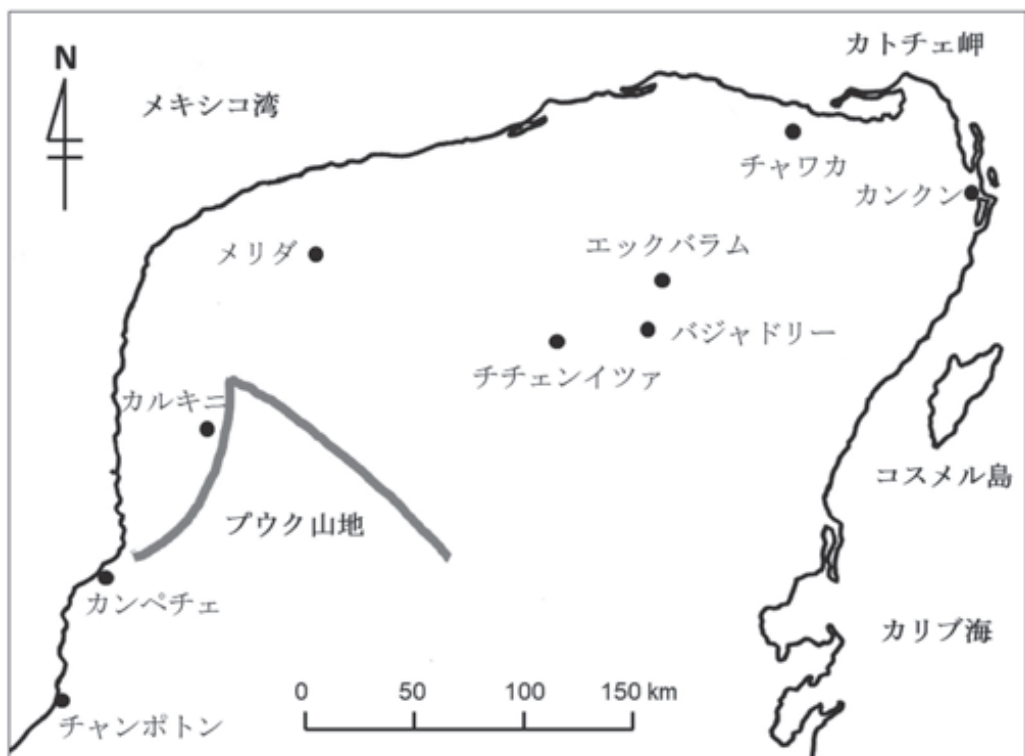


図1. ユカタン半島北部

この記述は、侵略側であるスペイン人ディアス・デル・カステージョ（Díaz del Castillo）の視点にもとづいている。ユカタン半島発見当初からのコンキスタドールである彼は、この戦闘だけでなく幾多の戦場を生き抜いた後、晩年に『ヌエバ・エスパーニャ征服の真の歴史（*Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*）』を書き上げた。そのため、自分の若き日の武勲や功績を主張する目的で、敵の数や味方の死傷者数を多めに述べているかもしれない。それでも当時のマヤ人の戦闘の一端を垣間見ることができることからこの有名なチャンポトン戦を冒頭に取上げた。

我々は一般的なマヤの戦闘の流れについてはおおよそわかっている。集団どうしの対峙、その後の飛び道具による応酬、勁烈な太鼓やほら貝の音、怒声や罵詈雑言が飛び交う中で、一对一の武器を用いた格闘に突入するのが通常の戦闘パターンであった³⁾。しかしスペイン人に「発見」、征服、植民地化される以前のマヤ人どうしの戦闘を当の本人たちがどう捉えていたか、戦争という現象が何を意味し、何のために行われたのか等、その概念についてはいずれの文書にも記録されていない。植民地時代（16世紀～19世紀）にマヤ人自身によって、ラテン・アルファベットを用いてユカタン・マヤ語で書かれた文書も今日までいくつか残っているが、このテーマに関して明確に説明したものはない。本稿は、スペインによる征服直前の時代、後古典期後期（14世紀～16世紀頃）⁴⁾ ユカタン半島北部の先住民マヤにとっての戦争概念を理解するプロセスのひとつとして、戦闘中の一対一の格闘行為が彼らの社会でもっていた意味について解明を試みるものである。

1 背景・方法論

マヤに関する植民地期史料群には、包括的にまとめられた「戦争概史」というものが存在しない。栄華を極めた「アステカ帝国」の征服者コルテスや、後のユカタン総督モンテホ父子はじめ多くのコンキスタドールがユカタンの先住民たちと剣を交えたにもかかわらず、である。後古典期後期マヤ軍事史研究に利用できる資料といえば、前述のディアス・デル・カステージョに加え、年代記作者のフェルナンデス・デ・オビエド・イ・バルデス（Fernández de Oviedo y Valdés）（1944）およびロペス・コゴジュード（López Cogolludo）（1996）、著名なフランシスコ会社司教ランダ（Landa）（1994）、そして16世紀末にスペイン王室に提出された『ユカタン歴史地理報告書（*Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán*）』に散見されるコンキスタドールやマヤ古老たちの証言などがある。しかしいずれも武器の説明やスペイン側から見た戦闘描写、勝敗の結果に関する簡潔な記述ばかりである。一方図像に関してだが、明確に後古典期後期に属するといえる戦争図像史料は皆無と言ってよい。一点だけ、メキシコ中央高原から「トルテカ人」がこの地に侵略したときの戦いを描いたと考えられる見事な戦闘シーンが描かれたチチェンイツァ遺跡のジャガー神殿（Templo de los Jaguares）の壁画がある。この壁画は後古典期前期（10～13世紀頃）に属する上に、本稿の研究対象となる時代とは主要武器も異なるが、参考資料として利用できる⁵⁾。

他方でメキシコ中央高原を拠点に「アステカ帝国」を築いた集団メシカおよび彼らと同族のナワ族諸グループについては、マヤの場合と違い、戦争関連の図像、多くの同時代の著者による事細かな描写や解説が『メンドーサ絵文書（*Códice Mendocino*）』（1976）などの先住民が描いた絵文書、サアグン（Sahagún）（2006）やドゥラン（Durán）（2006）の歴史書等に豊富に残されている。

マヤの戦争研究でも古典期（3世紀～10世紀頃）ペテン地方（ユカタン半島中南部）のみに関して言えば、20世紀から今日に至るまで盛んに行われている。これには2つの理由がある。ひとつは現地の遺跡での発掘調査の進展により石碑や土器、壁画等の図像データや武器の一部とみられる石器、濠や防壁などの防御設備が次々と発見され、豊富な情報が蓄積されているためである⁶⁾。図像データや石器からは、ブロックマン（Brokmann）（2000）に代表される、武器や防具を大きさ、形状、材質等により分類し、そこから戦闘での使用法や戦闘隊形まで分析する研究者もいる。二点目は、ここ数十年で大きく前進したマヤ文字の解読が挙げられる。氏族の姓や地名を表す「紋章文字」と呼ばれる文字群が特定されたことと、「戦争を仕掛ける」「臣下」「従属統治者」「～の即位を後見する」などを意味する文字が解読されたことで統治者間での従属関係や古典期における各氏族の武力行使を含めた支配域拡大の研究が飛躍的に発展した（Martin and Grube 2000:17-20）。

しかしながら「後古典期後期ユカタン・マヤの戦争」に関しては、前述のように情報収集が困難な状況のためか、または古典期の戦争研究に注目が集まっていたためか、これまで先行研究はほとんど行われてこなかった。ロイズ（Roys）（1972）やハッシグ（Hassig）（1992）のように当研究分野に触れている学者もいたが、いずれも「マヤ社会の一現象としての戦争」「メソアメリカ全体の中のマヤの戦争」のように付随項目としての扱いしかしておらず、入念な考察はなされていない。一方で、レペット・ティオ（Repetto Tió）（1985）やテヘダ（Tejeda）（2012）など表向き「後古典期後期マヤの戦争」を全面的に扱った研究もわずかにあるが、彼らは先述の古典期ペテン地方の考古学データ（とくに図像）も頻繁に情報源として利用している。研究対象の時代の史料不足を補うためである。ちなみに本稿でも作成時期不明のマヤ土器に描かれた図像をいくつか掲載したが、これは読者がマヤの戦闘場面等をイメージしやすいように添えた参考資料であることを予め断っておく。

「後古典期後期マヤの戦争」研究分野を進展させるために、本論文ではスペイン語およびユカタン・マヤ語で書かれた植民地期文書の詳密な史料批判に加え、新たな手法として「意味論的分析」を用いる。大越（2006）やハンクス（Hanks）（2010）によりすでにその効果が実証されている植民地期マヤ語の意味論的分析の手順とは、まず最初に戦争や戦闘に関連すると思われる単語すべてを、植民地時代にスペイン人（またはクリオージョ）宣教師たちがマヤ人情報提供者の協力を得て16～17世紀に布教目的で編纂したスペイン語・マヤ語語彙集（「辞典」とも呼ばれる）から抽出する。ユカタン・マヤ語に関しては、『モトゥル辞典（*Calepino de Motul*）』、『マヤ語語彙集（*Bocabulario de Maya Than*）』⁷⁾、『サンフランシスコ辞典（*Diccionario de San Francisco*）』に加え、ベルトラン・デ・サンタ・ロサ・マリア（Beltrán de Santa Rosa María）の『マヤ語文法書（*Arte del idioma maya*）』⁸⁾の計4冊の主要語彙集がある。さらに、19世紀に出版されたペレス（Pérez）の『マヤ語辞典（*Diccionario de la lengua maya*）』も分析に利用できる。この「辞典」は上記語彙集を含む植民地期に編纂された写本をもとに作成されたため、二次史料として扱われる。しかし、内陸のマヤ人村落で長年暮らした編者は、当時（19世紀）の先住民から直接聞き取った貴重な単語や意味も書き残しているのである（Pérez 1877:V）。

次に、選別した単語の別の意味を上記語彙集および古文書テキストでの用例から探し出す。そしてそれらの単語をさらに形態素に分解した上で、形態素自体の意味・用例もすべて一覧化する。最終的に、植民地期マヤ語文書中での使用例も含めすべての収集されたデータを比較分析し

て、対象形態素が本来持つ意味範囲を画定する。この手法により、当時のスペイン人が西欧言語概念やカトリック教が支持していたヨーロッパ的世界観を通じてしか認識できず把握がこれまで困難であったマヤ独自の世界観の再構成を企図している。レンケルスドルフ曰く、マヤ人にとって言葉は昔も今も彼らの生きる現実と密接に一体化しており、その現実の一部を形作っている（Lenkersdorf 2006:9）。故に彼らの言葉を分析することは、我々の時代や文化から遠く隔たった当時のマヤ世界観を解釈する糸口となりうるのである。

2 一対一の戦闘

チャンボトン村での戦いの前夜、100人足らずのスペイン人たちは一睡もせず周りに聞き耳をたて恐怖と闘っていた。敵のマヤ戦士の数を二万人以上と考えていたからである。それほどの大軍に囲まれたらひとたまりもない。そこで戦わずに母船まで逃げ帰るか、先手必勝で仕掛けるかの緊迫した議論が交わされたのである（Díaz del Castillo 2011:9）⁹⁾。実際に「二万」もの敵がいたかどうか定かではないが、当時彼我の人数差がかなりあったことは確かである¹⁰⁾。とすれば、もしマヤ人に兵力温存という概念があったならば、その人数差からスペイン軍を完全に包囲し、矢や投槍、投石器で打ち込む石つぶての遠距離攻撃だけで戦闘不能にすることができたであろう。しかしマヤ人たちにそんな考えは毛頭なく、100人足らずの侵入者に対し当然のごとく接近戦を仕掛けたのである¹¹⁾。

冒頭でも述べたように、マヤの戦闘では人数に差があっても必ず互いの軍が激突し、最終的には個々の格闘となった（図2）。戦士たちは綿鎧（メソアメリカ全土で使用されていた、内部に綿をぎっしり詰めた防護服）または腹巻（ユカタン半島独自の防具。綿を詰めた綿布を腹部に何重にも巻いた）に身を包み、短槍、諸刃の木剣、丸盾を手に揉み合い激しい攻防を繰り返した（図3）¹²⁾。乱戦の中でどちらかの統治者や指揮官が殺されるか捕らえられた時点で勝敗が決まり、指導者を失った軍は敵に命乞いをし降伏するか、戦士たちが狼狽して遁走し、戦闘継続不可能となったのであった。そのため我々はまずこの個人レベルの戦いの概念について理解しなければならない。



図2 (左). 接近戦 図3 (右). 丸盾と短槍を持った戦士

出典：Kerr (1998:K503, K1116)

スペイン語・マヤ語語彙集を何冊か調べると、戦争や武器に関する言葉が意外にも多く掲載されていることに気づく。スペイン植民地統治下のユカタン半島で、ヨーロッパの宣教師たちがカトリック教布教の道具として編纂した書物であることを考慮すれば興味深いことである。

本章のテーマである「一対一の戦闘または格闘」を表す用語は以下の通りである：

- *ppiz lim muk* (ピス・リム・ムック)
- *ppiz muk* (ピス・ムック)
- *ppiz ba* (ピス・バ)
- *ppizil ba* (ピシル・バ)
- *ppippiz ba* (ピピス・バ)
- *ppiz tan ba* (ピス・タン・バ)
- *ppiz lim tec* (ピス・リム・テック)
- *ppiz lim tanba* (ピス・リム・タンバ)

単語数自体は多いが、一見して明らかないようにいずれも限られた数の形態素で構成されており、組み合わせ方が違うだけである。語彙集に記載されている意味は：

「一対一での戦い、一対一で戦う」(*BMT*:140, 376, 512, *DSF*:315)¹³⁾

「体と体をぶつけあって戦うまたは格闘する、殴り合う、あがいて抵抗する。またそのような戦闘」(*CM*:665)¹⁴⁾

「格闘しつつ持ちこたえる」(*BMT*:570)¹⁵⁾

つまりどの説明も「一対一の戦い」という同じ行為を表している。

続いてこれら8つの単語を形態素に分解すると、以下のようになる：

- *ppiz*¹⁶⁾, *lim*, *muk*, *ba*, *il*, *tanba*¹⁷⁾, *tec*

さて、これらの形態素を材料に「一対一の戦闘」の意味論的分析に入るのだが、その前に、語彙的な意味を持つもの(語根)と持たないもの(機能的形態素)に分類する必要がある。以下は語彙的な意味を持たない機能的形態素である：

lim, *ba*, *tanba*, *tec*, *il*

これらはすべて接尾辞で、次のように用いられる：

- *lim*: 相互動詞 (*verbos recíprocos*) を形成する
- *ba*: 相互動詞を形成する
- *tanba*: 行為の相互性を表す
- *tec*: 迅速で敏捷な動きを表す
- *-al*, *-el*, *-il*, *-ol*, *-ul*: 抽象名詞を形成したり、動詞を受動態に変形するなどさまざまな意味と機能を持つ

以上のことから、前述の8つの単語を構成する形態素のうち、意味論的分析の鍵となるのは *ppiz* (ピス) と *muk* (ムック) であることが分かる¹⁸⁾。ではまず、名詞 *muk* の意味を分析しよう。

2-1 *muk*

ムック (*muk*) の語義は、いずれの語彙集でも容易に見つけることができる。「力 (*fuerza*)」(*CM*:531, *DSF*:244)、「人間や動物の力」(*BMT*:358)、「力、活力、強さ」(*Pérez* 1877:226) という意味である。しかしスペイン語の「*fuerza*」という単語は、「重いものを動かす力」「精神力」「耐久力」

「抵抗力」「強制力」「能力」など10以上の意味を持つ多義語である (DLE:707)。そのため「fuerza」という記述だけでは意味領域を明確にすることはできない。しかし、『マヤ語彙集』に *muk* の概念を理解するための重要な手がかりとなる解説があった：

- 「パンなどあらゆる食べ物の栄養分や効能」 (BMT:601) ¹⁹⁾

ここで言う「パン」とは我々の知る旧大陸起源の小麦を原料としたパンのことでなく、現在もメキシコを中心に主食として食べられているトルティージャやタマルのことである。入植開始当初、スペイン人たちはマヤの主食であったトウモロコシ粉の生地を薄く広げて焼いたトルティージャや、中に具を詰めてトウモロコシの葉で包んで蒸したタマルのことを自分たちが理解しやすいように「パン」と呼んでいた²⁰⁾。人間や動物の「ちから」²¹⁾は、食物とくに主食を摂取してしばらく経ってから体内にみなぎってくる。前述の解説から、生き物が動いたりモノを動かすための「ちから」、すなわち「エネルギー」の源は食物の中にあったとマヤ人たちが考えていたことが読み取れる。ではこのエネルギー *muk* は、彼らの概念ではどのような性質を持っていたのだろうか。

muk を使った用例の中に興味深い2つの語句、*lubul muk* と *tumte xulic a muk* がある。まず最初の *lubul muk* (ルーブル・ムック) について分析しよう。語彙集の説明によれば、この語句には以下のような意味がある：

- 「力や頑張り、気力を失う。衰弱する、力が衰える。病気または空腹によって疲れる、力が抜ける」 (CM:470) ²²⁾
- 「病気によって衰弱する」 (BMT:252) ²³⁾

lubul は「落下する」 (CM:470) という意味の動詞である。この動詞は *lubul co* 「歯が落ちる」 (*id.*) や *lubul ek* 「流星が落ちる」 (BMT:162) の例文が示すように、単純に「上から下に落ちる」現象または行為を表す。とすると *lubul muk* の語義は「エネルギーが落ちる」、つまり語彙集の説明にもある通り、病気や空腹などが原因で、個人に蓄積されていたエネルギーが低下することを表す言葉だったと解釈できる。このことから、食物をしっかりと摂取および消化できない状態に陥った人間のムックは「落ち」、体内から失われていくという性質を持っていたことがわかる。

では次の例文 *tumte xulic a muk* (トゥムテ・シュリック・ア・ムック) について見てみよう：

- 「君のちから〔ムック〕がどこまで到達するか試してみなさい」 (BMT:387) ²⁴⁾

まず *tumte* という動詞についてだが、語彙集にはさまざまな語義が載っているが、この文脈で最も適切な訳語は「試す」という意味である²⁵⁾。となると、この文で肝心なのは副詞 *xulic* の意味であるが、以下のように説明されている：

- 「どこまで」 (*id.*) ²⁶⁾
- 「最高点、到達点。これ以上先に行くことができない終点や端、限界に到達したまたは到達するであろう」 (CM:786) ²⁷⁾

さらに以下の *xulic* の用例を見てみるとその概念が一層よく理解できる：

- *xulic in numyaa* (シュリック・イン・ヌムヤー)：「私はとても貧窮している。極貧に到達しこれ以上ひどくなることはあり得ない」 (*id.*) ²⁸⁾
- *xulic u poch Juan tii batab* (シュリック・ウ・ポッチ・ファン・ティイ・バタブ)：「ファンはカシーケ (首長) をこれ以上ないほど軽蔑するに至った」 (*id.*) ²⁹⁾

つまり、*xulic* はある行為または状態が終点および限界点に到達したことを表すとともに、それ

が過去のある時点からずっと継続していたことも示しているのである。この *xulic* と関連した単語に *xul* (シュル) があるが、シュルに関して大越は「一定の継続している行為が終わる所」という概念を持っていたと指摘している (大越 2005:145)。まったく同じように、*xulic* も継続性と方向性を持った言葉だったのである。

シュリックがもつ概念を理解したところで例文「*tumte xulic a muk*」の解釈に戻ろう。最低到達点は「*tubul*」の項で見たように下方にあった。ということは最高到達点は当然上方にあることになる。要するにこの例文は、平常時のレベルにある挑戦者のムックが「力試し」の最中に徐々に上昇し、彼の体内で最高レベルにまで達することが期待された発言だったのである。しかし、挑戦者のエネルギーの「限界点」がどの辺りにあったのかは、試す前には誰にもわからなかったと推測できる。

以上の分析結果から、体内で定量をもたない *muk* は食物摂取によって増加し、本人の努力次第で最終的にそのレベルを未知の最高限界点まで到達させることが可能だったとわかった。一方で、空腹になったり病気を患うことでどんどんレベルが下がり、やがて体内から失われてしまうという性質も理解できた。体内で常に「上下」の変動を繰り返すエネルギー、要するにペレスが彼の語彙集で言うところの「内なるちから (*fuerza interior*)」(Pérez 1877:226) だったのである³⁰⁾。

2-2 *ppiz*

では、残るもうひとつの鍵となる形態素 *ピス* (*ppiz*) を分析しよう。動詞と名詞両方の機能を兼ね備えたこの単語は、以下の説明が示すようにごく一般的な「はかる」という意味をもつ：

- 「測る、または重さを量る」(*CM*:664)³¹⁾
- 「一般的な意味で、はかる」(*BMT*:468)³²⁾
- 「測定された、または計量されたもの。定規などで線を引かれたもの」(*CM*:664)³³⁾
- 「何かを測るための物差し。模範とし取り出すための見本」(*id.*)³⁴⁾
- 「雛型または見本」(*BMT*:242)³⁵⁾

この語は長さ、重さ、面積、容量等をはかる場合や、線を引き一定の部分を区切る場合など、何かしらの測定器具を基準として用いて比較する行為を示した。

*ピス*の基本的な意味がわかったところで、本章冒頭で提示された8つの単語を直訳してみると、語彙集には書かれていなかったユカタン・マヤ語での本来の意味合いが見えてくる：

- *ppiz lim muk*: ちからのはかり合い
- *ppiz muk*: ちからをはかる
- *ppiz ba*: はかり合い
- *ppizil ba*: はかり合い
- *ppippiz ba*: 繰り返すのはかり合い、急いだはかり合い³⁶⁾
- *ppiz tan ba*: はかり合い
- *ppiz lim tec*: 迅速で俊敏なはかり合い
- *ppiz lim tan ba*: はかり合い

すべての単語が「相手とのはかり合い」を意味している。はかられる対象はもちろん「ちから」すなわち「エネルギー」であるが、この *muk* という形態素は省略されていることが多い。つまり、本来の意味合いは「相手とのちからのはかり合い」だったのである。

ここでひとつ疑問が生じる。語彙集の説明によれば *ppiz* は何かしらの測定器具または見本を使用してはかるという意味だが、マヤ人たちはムックのように人間が直接見て触れることのできない存在を一体どのような測定器具を基準にしてはかろうと考えていたのか。一人の人間、戦士にとって自分のエネルギー量をはかるための最もわかりやすい「基準」は何だったのであろうか。

『マヤ語彙集』の中に以下のような説明を見つけることができる：

- *ppiz muk*, *ppippiz ba* : 「相手と争いながら、または戦いながらちからを試す」 (BMT:542)³⁷⁾
- *ppiz lim muk*, *ppiz tanba* : 「互いにちからを試す」 (id.)³⁸⁾

先程の例文「*tumte xulic a muk*」でも「ちから〔ムック〕を試す」という表現が使われていたが、説明の中では戦争や戦闘について触れていなかったため、一般的な力比への競技の話であったかもしれない。しかし今回の一番目の例の場合は「争いながら、または戦いながら (“*luchando o peleando*”）」と明記してある。この「*pelear*」という動詞に関してだが、18世紀前半にスペイン王立アカデミーより出版された『模範辞典 (*Diccionario de Autoridades*)』で調べると、項目の一番最初に「戦争する、戦闘を行う、武器を用いて互いに争う」という意味が記載されている (DA V:190)³⁹⁾。このことから、上記の *ppiz muk* および *ppippiz ba* の説明は、戦争での行為も示していることがわかる。つまりマヤ人は、対一の戦場での格闘のことをちから *muk* を試す行為と捉えていたのである。戦闘という緊迫した状況下で、彼らは己の体内に宿すエネルギーの限界を探るために、武装し敵意を剥き出しにした戦士を相手に力試しを行っていたのである (図4)。

己の肉体を動かすための原動力であり、また食物の消化によって体内に蓄積される眼に見えない個人のエネルギーは、物差しや秤や容器では測定不可能であった。そのため唯一の *muk* をはかる基準こそが、自分とほぼ同量の *muk* を体内に蓄えている人間であった⁴⁰⁾。マヤにとって個人レベルの戦闘は、戦場でひとりの戦士が課された単なる軍事命令ではなく、自分自身の強さを誇示するための行為でもあったといえる。

また前述の、戦いという言葉を使わない「互いにちからを試す」という説明からも、*ppiz lim*



図4. 対一の戦闘 (組打ち)

出典：Kerr (1997:K2352)

muk、*ppiz tanba* などの語は村の若者同士の取っ組み合いの力比べなどのことも指していたであろう。これらの流血を伴わない競技と、戦場で武器を手に敵と組打つ戦闘行為が、ユカタン・マヤ語では同じ概念を共有している。いずれの場合もエネルギー量が自分と近い相手に対し己のちからを限界までぶつけ相手を超越するレベルに到達できるか試し、その量を相手を倒すことで「はかる」のであった。

このような理由から、エネルギー *muk* をはかるには「敵」の存在が欠かせなかった。敵が目の前にいなければ自分のちからがどのレベルまで達するか知りようがなかったからである。とすれば、我々がマヤ社会での「一対一の戦い」の考え方にさらに一步近づくためには、彼らにとって戦場での「敵」がどのような存在であったのかも分析し理解しておかなければならない。

2-3 *nup*

前述の『模範辞典』によれば、スペイン語の「enemigo」という言葉は「味方でないばかりか公然と自分と対立する者、戦争で戦う相手」という意味であった (*DA* III:460)⁴¹⁾。一方で現代の同アカデミー発行の『スペイン語辞典』には「相手に対し悪意を持ち、その不幸を望むまたは害を与える人」という意味も見られる (*DLE*:887)⁴²⁾。では、後古典期後期から植民地期初期にかけてのマヤ社会では、戦場での敵をどのように捉えていたのであろうか。スペイン語の *enemigo* に相当する単語として宣教師たちが記した単語に *nup* (ヌップ) がある：

– *nup* : 「敵」 (*BMT*:309, *CM*:578, *DSF*:596)⁴³⁾

このヌップおよび関連用語の解説を調べると、彼らの「敵」のイメージには、自分から見た位置関係や相手の規模などの視覚的要素が強く影響していたことがわかる：

– *nup* : 「目の前にある対立するもの、何かと敵対または対抗させるために反対側に置かれるもの」 (*CM*:578)⁴⁴⁾

– *nupbezah* (ヌップベサフ) : 「あるものを他のものの正面に、または反対の立場にして一緒にする (置く)」 (*CM*:580)⁴⁵⁾

– *nup* : 「同じような、同等の」 (*DSF*:267, 640)⁴⁶⁾

– *nupulteil* (ヌプルテイル) : 「相手と背丈も力も同等の」 (*BMT*:424)⁴⁷⁾

つまり、自分と物理的に真正面から向かい合っていること、そして見た目も勢力も自分または自軍と同等であることが敵と呼べる条件であったことを示しているといえる。ユカタンの先住民にとって戦争での「敵」とは、戦場で自分たちの目の前にいて向かい合っている自分たちと同等のちから *muk* を有していると考えていたのであろう。

一方でこの形態素ヌップは、「敵」とは正反対の意味にも用いられていたことが興味深い：

– *u nup hanal, u nup ukul* (ウ・ヌップ・ハナル、ウ・ヌップ・ウクル) : 「普段一緒に食べる (飲む) 友人や家族の一員」 (*BMT*:93, *CM*:579)⁴⁸⁾

– *nup than, nup can* (ヌップ・タン、ヌップ・カン) : 「普段一緒に会話し、話が合う友人や家族の一員」 (*BMT*:93, *CM*:579)⁴⁹⁾、「考え方や生き方がよく似た友人」 (*DSF*:267)⁵⁰⁾

どの単語も、普段の生活で向かい合っているつも飲食を共にし腹を割って話せるうえに、生き方や考え方も共有するごく近い人々であることを表している。ただしこの場合、*nup* の後ろに「*hanal* (食べ物)」「*ukul* (飲み物)」「*than* (会話)」「*can* (会話)」など一緒に行う行為を示す言葉が必ず添えられている。

さらにもう一例を挙げよう：

－ *nup cahtal* (ヌップ・カフタル)：「妻にとっての夫、または夫にとっての妻」(CM:580)⁵¹⁾
nup の後ろに「*cahtal* (住まい)」が付くと、一つ屋根の下で寝食を共にするパートナー、つまり夫婦のことを表した。この例から推測すると、*u nup hanal* などの場合も、家族や友人の中でもいつも行動を共にする、自分にとって一番大事な相手について言及しているのではないだろうか。心理的にも物理的にも最も距離が近く、対になる存在が「ヌップ」ということである。

では、「情緒的に最も近い人」と「敵」とではどのような共通点があるのだろうか。まず、自分と相手が非常に近い位置で対面している場面が想像される。そしていずれの場合も「対をなすものの片方」と位置付けられている。要するに、後古典期後期から植民地期初期にかけてのマヤ人にとっては、最も親しい友人や兄弟も戦場の敵も、どちらも対等な立場で、互いに真正面から視線を向け合って対をなしている存在として認識していたのである(図5)。

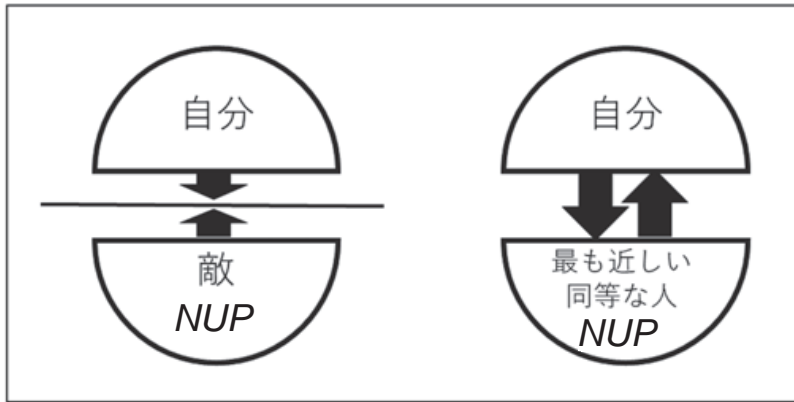


図5. 敵(ヌップ)の概念図

以上のことから、マヤの価値観においては *nup* という概念自体に良い意味も悪い意味もなく、単純に「自分と同等の相手」を表す語であったことが理解できた。敵を自分とまったく同じ存在と位置付け、ちからも均衡していたとみなしていたからこそ、エネルギー *muk* をはかり合うに値する相手、自分と「対をなすもう片方」と認識していたのである。敵軍と自軍とで一対を成していたと考えたからこそ、戦地では対立したが、勝敗が決まった後には従属や友好の形で絆を結び合うことが頻繁に行われたのである。

では根本的な疑問に戻るが、なぜ戦場でエネルギーをはかり合う必要があったのだろうか。その答えはマヤの勝負の習慣にあったと私は考える。均衡した力を正々堂々と比べて、その均衡を破って勝ったほうが相手に何かを要求できたのである。ユカタン半島北部低地の植民地期史料には何らかの勝負とその結果に関する記述が見当たらないため、有名なグアテマラ高地の植民地期文書『ポポル・ブフ (*Popol Vuh*)』より球戯の例を見てみよう。双子の英雄フナフプとシュバランケは地下世界シバルバの首長たちに球戯の勝負を挑まれ受けて立つ。その際首長たちは、勝ったときの賞品として4つの器いっぱい盛られた4種類の花を希望する。試合が始まり、力の拮抗した両陣営は激しいプレーを見せたが、結局兄弟は初日は破れてしまった。そのため彼らは首

長たちに要求された賞品の花をその夜摘み取りにいく羽目になったのである (PV:107)。球戯はユカタン半島を含むメソアメリカ全土で行われていたが、必ず敵味方同人数という公平な条件でプレーした (図6)。そして勝者は敗者に何か自分の欲するもの、とくに「有益なもの」を要求する権利を得るのであった。では、戦場での格闘に勝った戦士は、その結果何をすることができたのだろうか。



図6. 三対三で行われた球戯

出典：Kerr (1992:K3814)

3 勝利の果てに

エネルギーのはかり合いの末に相手を倒し組み敷いた勝者は、持っていた縄で相手を縛り上げ捕虜にした。戦いの挙句相手を殺した場合は、下顎を切り取って持ち帰り、肉をとりきれいに洗った後、腕飾りにした (Landa 1994:130)。そして、首長や将を殺害した者は輝かしい功名を立て、帰還後には歓待を受けた (*id.*)。

戦場のあちこちで個人戦の決着がつき大勢が明らかになってくる、もしくは自分たちの最高統治者や指揮官が捕縛または討取られたことが分かると、体力的にも精神的にも敵軍にかなわないと怖気づいた者たちが次々と戦場から離脱した。この臆病な感情の連鎖が戦闘全体の勝敗を決定づけた。勝者は逃げる相手を追撃、完全に戦意喪失総崩れとなった敵軍戦士を大量に捕獲した。また敵の村が付近にあればそのままの勢いで躍りこみ、女子供を捕らえ数多の戦利品を獲得した。たとえ敗軍の貴族たちが降伏を申し出たとしても、敗者は捕縛と略奪からは免れられなかったのである。

マヤ社会では貴族も庶民も、最高統治者を助けて出陣することが共同体内での当然の義務であった。そのため戦争に参加すること自体に対する報酬は支払われなかった (RHGGY I:269)。代わりに戦利品の一部をもらう権利が認められていた。軍が獲得した戦利品は、いったんすべて一ヶ所に集められ、カカオ、スポンディルス貝 (赤色の貝殻)、黒曜石、翡翠、ケツアル鳥の羽根などの威信財は王家や貴族の間で配分された。一方で戦争に参加した平民戦士には、全員に威信財以外の食糧などの戦利品が配分された (RHGGY I:378)。庶民にとっては普段の村での生活で得ることのできない「臨時収入」だったので、参加の大きな動機となったことであろう。反対に、一定

の年齢に達した成人男子であるにもかかわらず戦争に参加せず村に残った者は、出陣する軍の糧食などを提供しなければならなかったうえに、戦利品の分け前はもらえなかった (*id.*)⁵²⁾。

戦利品以外での戦士たちの「獲物」は戦争捕虜であった (図7、図8)。捕虜は捕らえた側の「財」としての役割を担った。まず戦後人質として、敵政体へ返還する代わりに相応の「身代金 (メソアメリカでは通貨は存在しなかったので威信財)」を要求することができた⁵³⁾。しかし、彼らの属する共同体に「身代金」を払えるだけの十分な威信財がない、または払う意思がない、もしくは人質交換交渉が決裂した場合などはそのまま捕獲された共同体の「財」となり、カカオなどの威信財と物々交換されたり、他政体の首長への贈り物として提供されたりと多岐にわたり利用された。統治者や貴族の身分の者が捕虜にされれば神々への生贄に供されることが多かった (*RHGGY*I:165)。



図7 (左). 連行される捕虜



図8 (右). 王の前に引き出された捕虜

出典：Kerr (1997:K2352, 1994:K4549)

しかし、戦争捕虜が辿るもっとも一般的な運命は奴隷にされることであった。ユカタン・マヤ語で「戦争捕虜」と「奴隷」どちらを示す場合にも同じ語が充てられていたことも、彼らの社会では捕虜は通常奴隷にされる定めであったことを裏付けている：

- *ppentac* (ペンタック)：「売買された奴隷。捕虜または使用人」(*CM*:663)⁵⁴⁾
- *munach* (ムナッチ)：「女性捕虜、女奴隷または女使用人」(*CM*:535)⁵⁵⁾

奴隷となった者は荷運びや水汲み、農作業、カヌー漕ぎなどの日常の重労働に従事する労働力として活用された⁵⁶⁾。戦争捕虜は敗者となったことで、自らの肉体でもってさまざまな形で勝者と彼が属する共同体に利を提供しなければならなかったのである。

では戦士たちが個人的に獲得した捕虜は戦後どのように扱われたのだろうか。指揮官や貴族戦士が捕虜にされた場合、捕獲者に褒美が与えられた後、その多くは先述のように生贄に供された。しかし、その人物の政治、行政、戦闘などの才が認められれば奴隷の身分のまま臣下として重用されることもあった⁵⁷⁾。それ以外の捕虜は、個人所有ではなくまとめて共同体の管理下に置かれた。カンペチェ州カルキニ村の先住民貴族たちがマヤ語で書き残した『カルキニ文書 (*Códice de Calkini*)』には、ガスパール・パチェコ率いるスペイン人コンキスタドーレスが同村にやってきたときに、征服者たちに供出するための奴隷を共同体で買ったとの記述がある。さらに、それ以

前に買われた奴隷たちも、村の政治をつかさどる老貴族たちの指示の下で共同体名義で買われたと明記されている(CC:44-45)⁵⁸⁾。ユカタン半島北部では、奴隷は上質カカオ等の地元で手に入らない貴重な威信財との物々交換に用いられる主要な「輸出品」であった。共同体と統治者一族の利益に大きくかかわる財であったため、その取引および管理は共同体の老貴族たちが行い、おそらく戦士個人には許可されていなかったであろう。しかしその代価として、捕獲者には共同体から「エネルギーのはかり合い」の勝利の結果として納得いくだけの食糧や塩などの日用品が与えられたことは十分に考える。

一方で、マヤ戦士がスペイン兵を捕虜にしたこともあった。冒頭で述べたチャンボトン村のマヤ住民とスペイン兵士たちとの戦闘でも、マヤ側にとっておそらく予想外に多くのスペイン人たちが弓矢で死んだが、それでも2人を捕虜にした。また、1528年にモンテホ総督が半島北部海岸を侵略した際、チャワカというところで現地住民と数回交戦し、マヤ側は多くの戦死者を出しながらも最終的に6人のスペイン兵士を連れ去った⁵⁹⁾。これらの捕虜を使ってマヤ側が身代金を要求したり、物々交換に利用したり、奴隷として働かせたという記録はない。当然神々の生贄に供されたのであろう。このことから、彼らにとって戦闘で捕虜を獲得することの重要性を窺うことができる。

4 一対一の接近戦の意味

後古典期後期のマヤ人は、開戦直前まで自分たちに有利に戦争を進めようと努力した。謀者を放って敵情を探り、通行困難な地形のところに戦士を埋伏させ、道を塞いで敵を奇襲するのは当たり前であった⁶⁰⁾。相手を侮ることなく、自軍と勢力も人数も同等と考えていたからこそ、敗北しないために決して油断しなかったのであろう。そして開戦後も、遠距離からは大量の矢石を放ち少しでも動ける敵戦士の数を減らそうとし、戦場では常に敵を包囲する動きをとった。しかしいざ両軍が激突し、槍を突き出し木剣で叩き切り組打ちあう一対一の戦闘が始まると、正面から向かい合った敵、すなわち自分の「対になる存在」と全力を出しきり限界まで格闘したのである。この個人レベルの闘いのことを、マヤ人たちは戦士が己の「内なるちから」を「片割れ」を相手にはかる力比べと認識していたのである。そして格闘での勝利の後には必ず組み敷いた相手から何らかの利を得たのである。以上のことを *muk*、*ppiz*、*nup* という3つの形態素および単語の意味論的分析から確認することができた。この一対一のエネルギーのはかり合いは、最高統治者への忠誠心からでも共同体への「愛郷心」からでもなく、純粹に自分のため、そして間接的には家族のための行為だったのである。

また格闘中は、組み合った相手に対しその瞬間に出せる最大限のエネルギーを振り絞り、相手よりもエネルギー量がある場で上回った方が「はかり合い」を制した。頑丈な盾や綿を詰めた防具を身に着けていたとはいえ、殺傷能力を持った武器で刺突・斬撃したので当然相手を殺すこともあった。しかし、できるだけ敵は殺さずに捕縛するのが暗黙の了解だったということが *ppiz lim muk* という言葉から推測できるのである。

相手を倒した末に勝者は次の3つのものを得た：1) 「ちからのはかり合い」で勝ったという共同体内での名声、そして名のある敵を捕らえるか討取った者には格別な栄誉と歓待。2) 戦役で軍が獲得した戦利品の分け前。3) 自分が捕らえた捕虜、そして平民戦士の場合は共同体に自分の捕

虜を差し出した際に与えられる財。マヤ社会では一人の捕虜は交換財として、そして奴隷として価値があり自分や共同体にとっての利が大きかったことも、一対一の格闘で敵を殺すより縛りあげるほうが好まれた一因であろう。

おわりに

スペイン人、とくに実際にマヤ戦士と闘ったコンキスタドールスはなぜ先住民の「一対一の戦闘」に関して記録を残さなかったのだろうか。まず第一には、コンキスタドールの無関心が挙げられるであろう。ヨーロッパからの征服者たちにとってマヤ戦士との格闘自体には何ら特別な思い入れもなかったし、個人戦の詳細を仲間や総督、役所に語ったところで「インディオの何某」相手では大した武勲とも認められなかった。さらに王室はじめスペイン本国の人々の無関心も手伝った。彼らは16世紀末に新大陸の住人に現地の地理や先住民の歴史や風習などを記録した「歴史地理報告書」の提出を要求した。その際、書き方マニュアルである「手引書」をあらかじめ配布し現地責任者が回答すべき50項目を挙げた。その中で先住民の戦争に関する項目はわずかにひとつしかなく、しかも彼らが誰と（何処の国や民族と）どのように戦争をしていたかなどごく一般的なことしか訊いていない（RHGGYI:8-12）。

加えてエンコメンデーロスを中心とした回答者の無関心もあった。報告書の出来が詳細であるか粗雑であるかは回答者の熱心さ、真面目さと、あるテーマに対する興味関心の深さに大きく左右された。そのため戦争の記述が皆無のものや、他人の報告書の完全なコピーもあった⁶¹⁾。他方で、報告書作成時の主要情報提供者であったマヤの古老たちにとっても、スペイン人が興味を示さないテーマに敢えて触れる必要はなかった。だからこそ、一対一の格闘の詳細とその社会における重要性は記録に残らなかったのではないかと想像する。

第二に、侵略者たちとの武器や防具の優劣の差が徐々に拡大したことによりマヤ人との個人的な組打ちの機会が大幅に減ったことも挙げられる。チャンボトン戦での苦い経験から学んだスペイン人たちは、キューバに帰ってすぐに兵士全員分の綿鎧を作らせ、以降先住民との戦闘には必ずこれを着用した⁶²⁾。その結果弓矢や槍の刺突による死者は激減、切れ味で勝るヨーロッパ製の剣や穂先でマヤ側を圧倒し、他方で熱帯地域での馬の扱いと騎馬戦術を会得したスペイン軍は、その後ユカタン北部の戦闘で大勢殺されることはなくなった。そのためマヤ戦士と取り組み合っ

て剣を交える機会もほとんどなくなったと考えられる。一方でマヤ人たちも同様に、自分たちがユカタン・マヤ語で書いた植民地期文書で「一対一の戦闘」についてまったく述べていない。これは、マヤ王族や貴族の多くがスペイン統治下での自分たちの特権を守り子孫に相続させることに心気を砕き、自分たちの王権の正当性や土地の境界の主張に関する文書を書き残すことにしか関心を示さなかったためである。彼らの戦闘の詳細については、記録しておく必要も理由もなかったのである。

ちなみにマヤ人は文書でスペイン人に言及するとき *dzul* (ツル「よそ者」) という言葉を用いた。外見や言語、文化などすべての点において違う異国人たちは「よそ者」以外の何物でもなかったのだが、戦闘においても殺傷能力に差をつけられた先住民にとって、エネルギーをはかり合えないヨーロッパの侵略者たちは *nup* (対をなすもう片方) などでは到底ありえなかったであろう。

マヤの戦争に関する概念は、報告書や年代記、植民地行政府文書などスペイン人の証言のみか

ら読み解くのは困難を極める。そして現在入手可能なユカタン・マヤ語文書の中でも、前述のように戦闘の細部や思想的側面には触れていない。だからこそ植民地期語彙集を使った意味論的分析が、同研究分野の進展の鍵を握っているのである。

注

- 1) 一度目の戦闘はカトチェ岬の首長から騙し討ちに遭ったときに経験した。Díaz del Castillo (2011:5-6) を参照。
- 2) ランダは死亡者数は 20 人だったと述べているが、本稿では実際に戦ったディアス・デル・カステージョの証言を尊重する。
- 3) このことは前述のディアス・デル・カステージョの著作や『モトゥル報告書 (*Relación de Motul*)』(RHGGYI:271) などの植民地期文書から明らかになっている。
- 4) 本稿では、後古典期後期のおわりはユカタン半島北部の征服が終了した 16 世紀と便宜上定めているが、実際には「スペインによる征服の完了まで」と定義される。なぜならチアパス、ベリーズ、グアテマラを含む広大なマヤ地域において、征服の完了時期は地域によって異なったからである。
- 5) 壁画には「アトラトル (*atlatl*)」と呼ばれるメキシコ中央高原で一般的に使用された投槍器が多く描かれている代わりに、弓矢を持った戦士は一人もいない。一方で植民地期文書には、弓矢と短槍がユカタン・マヤの主要武器であったと例外なく記録されている。さらに 16 世紀の投槍器については、ランダが狩猟の道具として紹介しているのみである (Landa 1994:97)。彼は別の箇所でもマヤが戦争で使用していた武器と防具について言及しているが、その中に投槍器は含まれていない (*ibid.*:129-130)。
- 6) 各遺跡での発掘データの詳細は Sharer and Traxler (2006) を参照。
- 7) オーストリア国立図書館所蔵であったため『ウィーン語彙集』としても知られている。
- 8) 同文法書の後半部分に記載されている用語集を利用できる。
- 9) スペイン側は 100 人程だったが「我々ひとりに対して 200 人以上のインディオがいるようだった」とディアス・デル・カステージョは当時を回想している。
- 10) Landa (1994:89) も参照。
- 11) スペイン軍はチャンボトン村に到着した当初は総勢 108 名だったが、母船警備のために何人か残っていた。
- 12) 戦士の武器および防具の詳細は Gozawa (2017:135-156) を参照。
- 13) “batallar de uno con otro” “guerrear uno con otro” “pelea, y pelear con alguno” “pelear cuerpo a cuerpo”。和訳するといずれもほぼ同じ意味なので、4 例をまとめて訳した。
- 14) “luchar, pelear, guerrear cuerpo a cuerpo, llegar a las manos, forcejar y pelear; guerra o lucha así”
- 15) “resistir peleando”
- 16) “*ppippiz*” は *ppiz* の繰り返し (reduplicación) である。
- 17) 実際には形態素は「*tan*」と「*ba*」に分解できるが、「*tan ba*」でひとつの機能を果たしているので本稿ではあえて分解しない。Beltrán de Santa Rosa María (2002:63) を参照。
- 18) 「*pp*」もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベットの「*p'*」は、上下の唇を口の内側に巻き込んだ後、内から外へ思い切り空気を開放させる。通常の *p* 行より強い発音。「*k*」もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベットの「*k'*」は、軟口蓋を舌の後部で強く鳴らす音。通常の *k* 行より強い発音。
- 19) “sustancia y virtud del pan y de cualquier otra comida”。以下、植民地期当時の綴りで書かれてい

- る原文については読者が読みやすいよう現代スペイン語の綴りに修正してある。
- 20) Landa (1994:115) を参照。
 - 21) 日本語でも「力」は多義語であるため、以降 muk の訳語としては違いを強調する目的で「ちから」と表記する。
 - 22) “perder la fuerza, esfuerzo y ánimo; debilitarse y descaecer en fuerzas; cansarse, desmayarse por enfermedad o hambre.”
 - 23) “descaecer por enfermedad”
 - 24) “Prueba hasta dónde llegarán tus fuerzas.”。「a」は二人称所有形容詞「君の」。
 - 25) その他の語義については CM (730) を参照。
 - 26) “hasta dónde, en cierta manera”
 - 27) “a lo más y lo que llega, ha llegado o llegará al fin o al cabo o al extremo, hasta más no poder”
 - 28) “estoy muy miserable, he llegado a suma pobreza, no puede ser mayor”。「numyaa」は「苦勞、貧窮、貧困、極貧」という意味の名詞、動詞、および形容詞である (CM:576)。「in」は一人称所有形容詞「私の」。
 - 29) “ha llegado Juan a despreciar tanto al cacique, que no puede ser más”。「poch」は「軽蔑、軽視、不敬」という意味の名詞および動詞である (CM:647)。「u」は三人称所有形容詞「彼の」。「tii」はこの例文の場合はスペイン語の「a」に相当する前置詞「～に対して」(CM:711)。「atab」は「首長、カシーケ」(CM:79)。
 - 30) ベレスは muk の派生語 mukintah の語意に関して「fortalecer con alguna fuerza interior (なんらかの内なるちからを使って強くなる)」と説明している。
 - 31) “medir o pesar”
 - 32) “medir, generalmente”
 - 33) “cosa medida o pesada; cosa reglada y trazada”
 - 34) “medida con que algo se mide; y la forma de dechado que se imita y saca”
 - 35) “dechado o muestra”
 - 36) このように動詞や名詞を重ねることで高頻度「何度も～する、頻繁に～する」を表す。もしくはその意味が強調されたり、特殊な意味が付加される。Beltrán de Santa Rosa María (2002:86-87) を参照。また、ppippizah「急いでぞんざいに測る (medir de prisa y sin cuidado)」(Pérez 1877:301) と ppippizbil「急いでぞんざいに、注意せずに測りながら (midiéndolo de prisa y sin cuidado ni atención)」(id.) の例から「急いで、注意せずにはかる」という意味も導き出せる。
 - 37) “Probar las fuerzas con otro luchando o peleando.”
 - 38) “Probar las fuerzas unos con otros.”
 - 39) “Batallar, combatir o contender con armas unos con otros.”
 - 40) 以下は現代の話なので本論文の研究対象時期とは異なるが、興味深い情報なので述べておく。ユカタン州バジャドリー市近郊、エックバラム遺跡近くのフヌク村では腕相撲や 5 対 5 での綱引きのことを ppiz muk と言い、勝負に勝った者が負けた方にビールなどをおごってもらうそうだ (ユカタン州フヌク村 (Hunukú) のマヤ人古老アナスタシオ・バース氏の証言 (2017 年 8 月))。これらふたつの競技に共通していることは、第一にどちらも対等な人数で、全力を出し切って勝負をする。そして第二に、たとえ両者に身体的な大差があっても試合が始まってみないと勝敗は誰にもわからないことだ。瘦せて小柄な人でも、巨体の相手に勝つこともあるのだ。つまり、今日でもマヤ人たちは「エネルギーのはかり合い」を行っているのである。
 - 41) “El que no solo no es amigo, sino declaradamente contrario” “Vale también el contrario en la guerra, aquel a quien se le hace, o con quien se tiene públicamente”.

- 42) “Persona que tiene mala voluntad a otra y le desea o hace mal.”
- 43) “enemigo, adversario, contrario”。この *nup* が戦場における交戦相手の意味を有していた証拠に次の例文がある：*katun te a nupob*「敵へ戦争を仕掛けよ (Haz guerra a tus enemigos)」(BMT:376)。「*katunte*」は「戦争する、戦争を仕掛ける」(CM:413)で、「*-ob*」は複数を表す接尾辞である。
- 44) “Cosa contraria, que está de frente u otro que está de frente; y opuesto de cualquier cosa, que se le pone en contra o el contrapeso que se pone a alguna cosa.”
- 45) “juntar una cosa enfrente de otra o en contra de otra。”。「*-bezah*」は強制動詞 (verbos compulsivos「無理やり～する」) を作るための接尾辞 (BMT:31)。
- 46) “igual, parejo”
- 47) “igual con otro en estatura y en fuerzas”。「*te*」および「*teil*」は動詞などを名詞化する接尾辞、または「～の人」を意味する接尾辞。
- 48) “amigo que come o bebe de ordinario con otro” “amigo y familiar que come con otro” “el [amigo o familiar] que bebe con otro”
- 49) “amigo con quien uno trata de ordinario” “amigo o familiar con otro o que está conforme con él en vida, parecer u opinión; y que trata y parla con él”。「*th*」もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベットの「*t*」は、舌先を上歯茎裏に強く付けた後、思い切り空気を開放させる。通常のタ行より強い発音。
- 50) “compañero en el parecer o vida” “familiar, amigo”
- 51) “la mujer respecto del marido o el marido respecto de la mujer”。「*cahtal*」は「ある場所に住む、または定住する (morar en alguna parte o estar de asiento)」(CM:103)「住居、家屋、住まい、定住 (vivienda, habitación, morada, establecimiento)」(Pérez 1877:40)。
- 52) 戦争に行かなかった男たちは、怖気づき徴兵を拒否したのではなく村を守るために輪番で村に残ったと思われる。ランダの記述にも「ホルカン (*holcan*) と呼ばれる兵士として選ばれた人々がいたが、彼らでも十分でない場合はさらに人々をかき集めた」(Landa 1994:130)とあることから、成人男子全員が出陣したわけではなかったことが読み取れる。戦場で参加者全員が死亡または連行されたとしても村が存続できるように、常に一定数の成人男性が留守を預かっていたと考えることができる。Gozawa (2017:50) を参照。
- 53) 「*loh*」という動詞は「捕虜を請け戻す (redimir al cautivo)」という意味である (BMT:563)。また「*lohebal baczah*」という語は「捕虜のために払われる身代金 (rescate, lo que se da por el cautivo)」を意味する (CM:465)。
- 54) “esclavo comprado o vendido; cautivo o siervo”
- 55) “cautiva, esclava o sierva”
- 56) 戦争捕虜だけでなく、盗みを働いたり借りたものを返さなかったりと村の掟を破った者も奴隷にされたが、仕事内容は同様であったと考えてよいであろう。
- 57) 『カルキニ文書』には、Na Cabal Batun など「*Na*」で始まる名前を持つ者数名が統治者所有の奴隷として述べられている (CC:57, 81-82)。ユカタン・マヤ社会では貴族階級の者だけが *Na* で始まり、後ろに母姓、続けて父姓で構成される名を名乗ることができた。うち 1 名 Na Cahun Uc は老人であった上にマトゥという地域の重要な地方氏族出身であったことから、通常の荷運び奴隷としてではなく、奴隷の身分ながらも統治者の臣下として重要な政治的役割を果たしていたことが推測できる (*ibid.*:82)。他にもユカタン半島に漂着した後、マヤに帰化したスペイン人ゴンサロ・ゲレーロがモンテホ総督に宛てた手紙には「私は奴隷の身分だから自由はない」と書いてスペイン軍への合流を拒否しているが、実際は妻子を持ち、主であるマヤ人首長の右腕となり、将軍として戦争の指揮を執っていた (Fernández de Oviedo y Valdés 1994 VIII:186)。

- 58) 文書ではイシュ・チャン・ウィツイルという女奴隷を“*mul manbil tumen cah*”したと述べられている。「*mul-*」は「共同体の、公共の利益の」(CM:533)で、「*manbil*」は「買われたもの」(CM:504)。「*tumen cah*」は「村(共同体)によって」。つまり「共同体によって買われた〔女奴隷〕」という意味である。
- 59) *RHGGY* (II:296) および Fernández de Oviedo y Valdés (1944 VIII:181) を参照。
- 60) 後古典期マヤの戦闘全般に関する詳細は Gozawa (2017) を参照。
- 61) 例えば、『キティルクム・カビチェ報告書』(*RHGGY*I:169-185) 『キスィル・シティルベッチ報告書』(*ibid.*:187-203) 『テカント・テバカン報告書』(*ibid.*:205-219) 『イサマル・サンタマリア報告書』(*ibid.*:293-308) を比較すると、前記3報告書は、『イサマル・サンタマリア報告書』を転写し、一部を書き換えただけであることがわかる。詳細は Gozawa (2017:124) を参照。
- 62) *RHGGY* (I:67) や Díaz del Castillo (2011:39) などを参照。

参考文献

大越 翼

- 2003 「聖なる樹の下で—マヤの王を考える—」角田文衛・上田正昭監修、初期王権研究委員会編『古代王権の誕生 II 東南アジア・アメリカ大陸編』、pp.169-205。
- 2005 「対立と融合と」貞末堯司編『マヤとインカ：王権の成立と展開』、pp.139-152。

クラウゼヴィッツ、カール・フォン

- 2009 『戦争論』、日本クラウゼヴィッツ学会訳、芙蓉書房出版。

ポランニー、カール

- 1966 『経済と文明』、栗本慎一郎・端信行訳、サイマル出版会。

リクール、ポール

- 1993 『解釈の理論』、牧内勝訳、ヨルダン社。

Beltrán de Santa Rosa María, Pedro

- 2002 *Arte del idioma maya*, edición anotada y crítica de René Acuña, UNAM, México.

BMT

- 1993 *Bocabulario de maya than*, editado por René Acuña, UNAM, México.

Brokmann, Carlos

- 2000 “Armamentos y tácticas: evidencia lítica y escultórica de las zonas Usumacinta y Pasión”, Silvia Trejo (ed.), *La guerra entre los antiguos mayas, Memoria de la Primera Mesa Redonda de Palenque*, INAH, México, pp.261-286.

Libro de Chilam Balam de Chumayel

- 1941 Prólogo y traducción del idioma maya al castellano por Antonio Mediz Bolio, UNAM, México.

CC

- 2009 *Códice de Calkiní*, introducción, transcripción, traducción y notas de Tsubasa Okoshi Harada, UNAM, México.

Chamberlain, Robert

- 1974 *Conquista y colonización de Yucatán 1517-1550*, traducción de Álvaro Domínguez Peón, Editorial Porrúa, México.

Chronicle of Chac Xulub Chen

- 1882 "The Chronicle of Chac Xulub Chen by Nakuk Pech, 1562", Daniel G. Brinton (ed.), *The Maya Chronicles*, Brinton's Library of Aboriginal American Literature, Number 1, Philadelphia, pp.187-259.

CM

- 1995 *Calepino de Motul: diccionario maya-español*, Ramón Arzápalo Marín (ed.), tomo 1, UNAM, México.

Códice mendocino

- 1979 *Códice mendocino o colección de Mendoza, manuscrito mexicano del siglo XVI que se conserva en la Biblioteca Bodleiana de Oxford*, editado por José Ignacio Echeagaray, prefacio de Ernesto de la Torre Villar, San Ángel Ediciones, México.

Cortés, Hernán

- 2010 *Cartas de relación*, nota preliminar por Manuel Alcalá, Editorial Porrúa, México.

Crónica de Yaxkukul

- 1926 *Crónicas mayas: crónica de Yaxkukul*, por Juan Martínez Hernández, editado por Carlos R. Menéndez, Talleres de la Compañía Tipográfica Yucateca, S.A., Mérida.

DA

- 1990 *Diccionario de Autoridades*, Tomos I-VI, edición facsímil, Editorial Gredos, 3 tomos, Madrid.

DLE

- 1992 *Diccionario de la lengua española*, 20ª edición, Real Academia Española, Madrid.

DSF

- 1976 *Diccionario de San Francisco*, Oscar Michelon (ed.), Akademische Druck - u. Verlagsanstalt, Graz.

Durán, Diego

- 2006 *Historia de las Indias de Nueva España e islas de tierra firme*, la prepara y da a luz Ángel Ma. Garibay K, 2 tomos, Editorial Porrúa, México.

Farriss, Nancy

1984 *Maya Society under Colonial Rule: The Collective Enterprise of Survival*, Princeton University Press, Princeton.

Fernández de Oviedo y Valdés, Gonzalo

1944 *Historia general y natural de las Indias, Islas y tierra-firme del mar océano*, prólogo de J. Natalicio González, notas de José Amador de los Ríos, tomos 2, 3 y 8, Editorial Guaranía, Asunción.

Gozawa, Keisuke

2017 “La guerra entre los mayas del Posclásico tardío: conceptos, prácticas y proceso de expansión”, tesis de doctorado en Estudios Mesoamericanos, UNAM, México.

Hanks, William F.

2010 *Converting Words: Maya in the Age of the Cross*, University of California Press, Berkeley.

Hassig, Ross

1992 *War and Society in Ancient Mesoamerica*, University of California Press, Berkeley.

2000 “La guerra maya vista a través del Altiplano posclásico”, Silvia Trejo (ed.), *La guerra entre los antiguos mayas: Memoria de la Primera Mesa Redonda de Palenque*, INAH, México, pp.157-187.

Keegan, John

2013 *El rostro de la batalla*, traducción de Juan Narro Romero, Turner Publicaciones S.L., Madrid.

Kerr, Justin

1994-99 *The Maya Vase Book*, the electronic edition, Kerr Associates, vols.1-4, New York.

Landa, Diego de

1994 *Relación de las cosas de Yucatán*, estudio preliminar, cronología y revisión del texto por María del Carmen León Cázares, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, Cien de México, México.

Lenkersdorf, Carlos

2006 *La semántica del tojolabal y su cosmovisión*, UNAM, México.

Lienzo de Quauhquechollan

2007 *Quauhquechollan, El lienzo de la conquista*, Universidad Francisco Marroquín, Guatemala.

López Cogolludo, Diego

1996 *Historia de Yucatán*, H. Ayuntamiento de Campeche, 3 tomos, Campeche.

Luna Kan, Francisco (ed.)

1977 *Enciclopedia yucatanense: época maya*, tomo 2, Gobierno de Yucatán, México.

Martin, Simon and Nikolai Grube

2000 *Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*, Thames & Hudson, London.

Okoshi Harada, Tsubasa

2006 “Kax (monte) y luum (tierra): la transformación de los espacios mayas en el siglo XVI”, Kazuyasu Ochiai (ed.), *El mundo maya: miradas japonesas*, UNAM, México, pp.85-104.

Papeles de los Xiu de Yaxá, Yucatán

2001 Sergio Quezada, Tsubasa Okoshi Harada (eds.), UNAM, México.

Pérez, Juan Pío

1877 *Diccionario de la lengua maya*, Impresa literaria de Juan F. Molina Solís, Mérida.

PV

2013 *Popol Vuh: Herramientas para una lectura crítica del texto k'iche'*, traducción al español, notas gramaticales y vocabulario de Michela E. Craveri, UNAM, México.

Repetto Tió, Beatriz

1985 *Desarrollo militar entre los mayas*, Maldonado Editores, INAH, SEP, Mérida.

RHGGY

1983 *Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán*, Mercedes de la Garza (coord.), 2 tomos, UNAM, México.

Roys, Ralph L.

1957 *The Political Geography of the Yucatan Maya*, Carnegie Institution of Washington, Washington.

1972 *The Indian Background of Colonial Yucatan*, University of Oklahoma Press, Norman.

1982 *The Titles of Ebtun*, AMS Press, New York.

Sahagún, Bernardino de

2006 *Historia general de las cosas de Nueva España*, numeración, anotación y apéndices por Ángel Ma. Garibay K, Editorial Porrúa, México.

Sharer, Robert and Loa P. Traxler

2006 *The Ancient Maya*, 6th edition, Stanford University Press, Stanford.

Tejeda Monroy, Eduardo Arturo

2012 “La guerra en las Tierras Bajas Septentrionales mayas durante el Posclásico tardío: organización, desarrollo y táctica militar después de la caída de Mayapán”, Tesis de licenciatura

en arqueología, ENAH, México.

Visita de Diego García de Palacio a Yucatán, 1583

2009 Edición anotada y crítica de Inés Ortiz Yam y Sergio Quezada, UNAM, México.

BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2018

<ARTÍCULOS>

- “Medir la fuerza”:
un concepto de la batalla maya en el Posclásico tardío
..... Keisuke GOZAWA 1

<NOTAS Y COMENTARIOS>

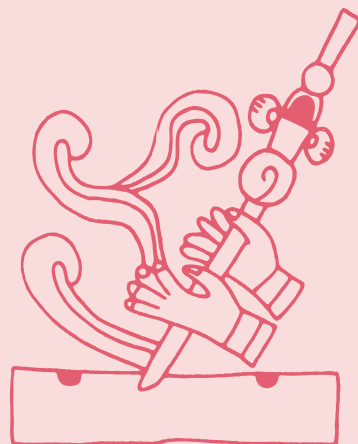
- El *manga* como herramienta didáctica para la difusión del patrimonio cultural
y la historia local: el conocimiento y la experiencia que la población tiene con
el sitio arqueológico en San Matías Tlalancaleca, México.
..... Takanori KOBAYASHI 25

<NOTAS DE INVESTIGACIÓN>

- The Cultural Revitalization in Bluefields, Caribbean Coast of Nicaragua:
Spaces for Art Activities and Musical Expressions
..... Kay AOKI 47
- Investigación del sitio arqueológico Iglesia Vieja
..... Akira KANEKO 67
- Surcos de cultivo prehispánicos encontrados bajo las cenizas del Volcán Plan
de la Laguna, El Salvador, C.A.
..... Shione SHIBATA, Oscar CAMACHO,
José Gabriel CERÉN y Jenny Elizabeth MENJÍVAR 99

<RESEÑA DE LIBROS>

- 67 capítulos para conocer Guatemala, segunda edición, compilado por Mieko
SAKURAI Takashi USHIJIMA 115



Vol.
18